

# 2024年度体験学習プログラム 参加学生レポート集

## 国内体験学習プログラム

### 災害を学ぶスタディツアー

「～東日本大震災から学ぶ、まちづくりと防災・減災  
in 宮城県石巻市～」

<b>■参加学生</b>	
山本 安紋(経済学部 4 年次生)	池本 政紀(文学部 3 年次生)
越岡 滉周(文学部 3 年次生)	佐原 芭奈(文学部 2 年次生)
中矢 柊成(社会学部 2 年次生)	井狩 咲希 2(政策学部 2 年次生)
平川 育海 2(政策学部 2 年次生)	井田 あい子(心理学部 2 年次生)
伊藤 綾音(心理学部 2 年次生)	平井 陽菜(心理学部 2 年次生)
近藤 恭香(文学部 1 年次生)	折元 慎一朗(政策学部 1 年次生)
世戸 紳之典(政策学部 1 年次生)	稲場 しほ(国際学部 1 年次生)
山口 礼(国際学部 1 年次生)	雨宮 正典(農学部 1 年次生)
<b>■テーマ</b>	
～東日本大震災から学ぶ、まちづくりと防災・減災 in 宮城県石巻市～	
<b>■企画・引率</b> 竹田 純子 (ボランティア・NPO 活動センター ボランティアコーディネーター) ヒギンズ 尚美 (ボランティア・NPO 活動センター ボランティアコーディネーター)	
<b>■協力者・団体</b>	
高橋頼雄さん、一般社団法人 雄勝花物語、公益社団法人 3.11 メモリアルネットワーク、一般社団法人ウィーアーワン北上、一般社団法人石巻じちれん、のぞみ野第二町内会	

## 1. 目的

ボランティア・NPO 活動センターが実施する国内体験学習プログラムは、学生が該当地域の地域住民や NPO/NGO との交流を通じて、国内におけるその地域の抱える問題に触れ、より深く社会の問題について考え、その問題解決に向けて自身の問題として考えるきっかけを作ることを目的としています。

2024 年 1 月に、令和 6 年能登半島地震が発災するなど、自然災害が続き、漠然とした不安を感じている人も多いと思います。このような状況下だからこそ、東日本大震災で被災した地域に赴いて学ぶために本プログラムを開催しました。

- (1) 東日本大震災について学ぶ
- (2) 防災や減災、復興まちづくりについて学ぶ
- (3) 未来へのアクションを考え、行動できるようになる。

## 2. 概要

### (1) 事前学習会

2024 年 12 月 17 日(火)

- ・参加者の顔合わせや事務連絡
- ・参加にあたっての訪問地域についてミニレクチャー

### (2) スタディツアー

2024 年 12 月 25 日(水)～12 月 28 日(土)

#### ○1 日目 12 月 25 日(水)

朝、京都駅から新幹線で、仙台へ。

仙台駅到着後はバスで石巻へ向かいました。

最初の訪問場所は伝承交流施設 MEET 門脇で、この施設を運営する「3.11 メモリアルネットワーク」の方から展示やシアターでの映像、発災時に住民が避難した動きを分析したデータなどを元にした様々なお話を伺いました。事務局長の中川さんからは「よりよい復興とは?」「防災はわかっているけどできない、

だから本気で取り組む」「避難の連鎖」など、印象的な言葉とその背景にあるエピソードをお聴きしました。

#### ○2 日目 12 月 26 日(木)

午前:震災遺構門脇小学校を訪問。3.11 メモリアルネットワークの語り部の方に加え、数年前からこの活動に関わるようになった東北大学生からもお話を聴きました。小学校を襲った津波火災や日頃からの避難訓練などを聴き、改めて備えが大切だと認識しました。

午後:震災遺構大川小学校を訪問。大川伝承の会の語り部の方からあの日何があったのか、遺族の想いやその後の訴訟のことなどを聴きました。北上地区へ移動後は「ウィーアーワン北上」佐藤さんより、高台集団移転支援とその選択をふりかえって思うことなどについてお話しいただきました

#### ○3 日目 12 月 27 日(金)

午前:雄勝を訪問し、本学が雄勝で復興し年活動に取り組み始めてからずっとお世話になっている高橋さんにお話いただきました。防潮堤のこと、行政への複雑な思い、被災してもできることなどを聴き、魂の言葉に涙する学生や、積極的に質問する姿も。そして雄勝地区慰霊公園を訪れた後、雄勝ローズファクトリーガーデンへ。

午後:当時雄勝小学校教員だった徳水さんからフィールドワークと座学で災害について学んだ後、ガーデンで育てているオリーブの施肥に全員で取り組みました。

#### ○4 日目 12 月 28 日(土)

午前:「のぞみ野第 2 町内会」の皆さんと復興公営住

宅の清掃活動をしました。その間2名の学生は石巻のお雑煮作りをお手伝い。清掃を終えて昼食交流会を行った後、一般社団法人石巻じちれんの方からこの地域の背景、住民の皆さんからは自主活動の運営ややりがいなどをお聴きしました。

午後:4日間通して、活動終了後には毎日振り返りを行いました。この日の総括でも、出会った人々から災害について学んだことや悩みながら考えたこと、「こうなりたい」など、ひとり一人が自分の言葉で熱く語りました。その後、バスで仙台駅に向けて出発し、17:00仙台駅を解散しました。

### (3) 事後学習会

2025年1月7日(火)

スタディツアーから帰ってきて改めて考えたこと、取り組んだこと等、報告会で発表することについて一人ひとり発表して共有しました。

### (4) 災害を学ぶスタディツアー活動報告会

2025年1月17日(金)17:30~19:00

会場:

深草キャンパス 和顔館アクティビティホール

瀬田キャンパス ボランティア・NPO 活動センター

(LIVEビューイング)

オンライン(Zoom配信)

参加者:99名(3会場合計・登壇者/関係者含)

学生・教職員・一般の方や他大学ボラセンの方など多くの方にご参加いただきました。

内容:

①来場者へ災害への備えに関するアンケート  
今すぐ取り組めることの紹介

②スタディツアー日程の紹介と参加学生の報告

③石巻市で訪問した団体の方(オンライン参加)  
と石原センター長のコメント

### 3. コーディネーター所感

今回から、災害を学ぶスタディツアーと形を変えて学内で募集し、開催しました。当初、夏に実施する予定が台風の影響で延期になるなど、いろいろとトラブルもありましたが、とても学び深いスタディツアーになったと思っています。3泊4日という短い時間ではありましたが、学生達は、日を追うごとに学びを深めていました。これも、年の瀬の寒くて忙しい時期にもかかわらず、地元の皆様の協力があればこそ、実施出来たと思っています。ご協力いただいた皆様に心より感謝とお礼を申し上げます。

学生達の報告の中でロ々に語られているように、災害はいつ起こるか分かりません。災害を防ぐことはできませんが、日常の取組みで減災はすることが出来ます。これからも学生と共に災害への学びを深め、減災に取り組みたいです。

〈報告者:竹田 純子

(深草キャンパス コーディネーター)〉

## 「現地で学び、伝える」

経済学部 4 年生 山本安紋

私がスタディツアーに参加して学び得たことは、現地に暮らす方々の目線でまちを見て、お話を聞き考えることの重要性です。東日本大震災による被害の実態は、数字や地図で表され、その多くを閲覧できます。しかし、津波から避難した人々がどのようなルートをたどっていたか、どの位置にいれば津波を回避できたか、どの位置から津波に襲われるまちを見ていたのか、という目線は現地に行かなければ感じ取れない感覚です。そうした目線を共有する感覚を持つことで、被災された方々が訴える避難行動の是非や、犠牲を生んでしまった結果への原因究明の必要性を、より高い解像度を持って理解できました。

避難行動に限らず、復興においても現地に行ってみるものの重要性があります。沿岸部で見た防潮堤は写真を見て想像していたより大きく、先代から紡いできた漁村の景色に比べ、居住区と海に大きな距離を作っていると感じました。また、防潮堤の果たす役割として、そこにある防潮堤が何を守っているのか、構造として意味があるのかという点は、その指摘を解説していただいていた気づけたことですが、解説していただかないと気づけなかったことに悔しさを覚えました。



石巻市雄勝町で見た防潮堤



雄勝ローズファクトリーガーデンでの講義の様子

そして、東北も復興の渦中にある、という認識も強く印象に残っています。時間の経過とともに浮き出る課題や、復興への取り組みの中で気付いたことを教えていただき、東北の復興の最前線に触れ、他の地域にも生かせると感じました。課題の多さもありますが、ガーデンづくりや杜づくり、復興住宅の掃除など、何か手を動かして復興に参加できるという実感も湧き、また行ってできることをやってみたいです。

上記のように、現地でお話を聞き学ぶことは、目線を共有する感覚を得て、防災や復興の本質、いちばん大切なことに気づきかけとなりました。この感覚と気づきを与えてもらったことは、それを他に伝え、生かしていく責任であると受け取っています。自ら現地に赴き学ぶことが重要、と理解しましたが、現地でその学びを支えてくださる方がいないと成り立ちません。現地という濃い空間で学ばせていただいた方々に感謝の念を込めて、大学のある京都やボランティア先である能登で学びを還元します。石巻を起点として次の地点に学びをつなげることが私の役割だと自覚しました。まず、私にできることは、家族や友人、能登のボランティア先でできた知人に、石巻での学びを伝えることです。こうした積み重ねのもと、次の災害が起きた際に、「東日本大震災の教訓が役に立った」という声が石巻の皆さんのもとへ届くことを願っています。

## 「防災と人とのつながりの大切さ」

文学部 3 年生 池本政紀

今回のスタディツアーで、防災について深く学べたと思います。門脇小学校や大川小学校の震災遺構を実際に見て、津波の威力や、こんなにも簡単に人が死んでしまうということに恐怖を感じ、命の尊さを実感しました。門脇小学校では実践的な災害訓練が行われていたため、学校に残っていた大勢の児童たちの命が救われました。災害はいつ起こるか予測不可能ですが、正しく避難をしていれば救える命はあるので、大川小学校のようなことが二度と繰り返されないようにこれから学び続けていかなければいけないと思いました。

雄勝ローズファクトリーガーデンでの防災教育では津波は狭いところで波が高くなると学びました。内陸部だからといって油断出来ないと改めて強く思いました。沿岸部に住んでいる人たちより内陸部に住んでいる人たちは防災意識が薄れていると思います。実際に南海トラフが起こってビルの間などで津波が高くなったりして内陸部にも津波が来た時、生死を分けるとさの判断ができるのだろうかと思いました。私は、兵庫県の内陸部の人間で、今まで地震に対する避難訓練は行ってきましたが、津波に対する避難訓練はしたことがありませんでした。だからなおさら防災意識を強く持ち、これからふとした時に避難経路を確認したりして、想定外のことを少なくしたり、自分がいる場所の防災マップを確認したりして日頃からの準備をして防災意識を高めていきたいと思いました。ここで、これらの適切な防災に関する知識や過去の経験を学んだことで、災害が起こった時、自分から周りに呼びかけて避難の連鎖を作れる人間になれるようになりたいと思いました。

私が今回のスタディツアーの参加理由は、小学校の時、東日本大震災の津波の映像を見て、『怖い』と思ったことで、災害について深く学んで災害に対処する知識を身につけたいと思っていたことがきっかけですが、実際に学んでいく中で、知識を得て防災知識を理解するだけでなく、災害が起

こった後のことや被災者たちに目を向けていかなければいけないと思うようになりました。展示されていた仮設住宅を見て、暮らしの大変さを感じ、大川小学校のジャンパーやランドセルを見て、可哀想で泣きそうになりました。災害が起こるということは、その後も、たとえ震災で破壊された町が元通りになっても災害の跡は残り続けるのだと思いました。

高橋頼雄さんの話で、「災害にあった人は支援されている側に立ち続けるのが辛く自分たちで出来ることは自分たちでしたいという思いを持っている」と聞きました。災害復興公営住宅の皆さんと清掃活動をしている時に会ったきよ子さんが、ゴミを拾いながら「自分たちで出来ることは自分たちでしたいから毎日周囲の周りのゴミを拾ったりしている」とおしゃっていたのを聞いて、そのことを強く実感しました。

清掃活動後の交流会で、きよ子さんから「孫に似ている」と言われ、心が温かくなりました。今回のスタディツアーでは、防災について深く学べたと共に人とのつながりの大切さを実感した濃い 3 泊 4 日でした。

みなさん本当にありがとうございました。



復興公営住宅の皆さんと一緒に記念撮影

## 「たくさんの言葉と想いのバトン」

文学部 3 年生 越岡 滉周

今回の龍谷大学国内体験プログラム災害を学ぶスタディーツア～東日本大震災から学ぶ、まちづくりと防災・減災 in 宮城県石巻市～の中で、石巻市を訪れた際に、そこに元々住まわれていたり、宮城県の外からきたりした方が震災を通じて、さまざまな過去を語ってくれた、本当にたくさんの言葉が私の心の中に残っています。

私は、自分の出身である石川県で起きた能登半島地震と重ねてしまうのですが、宮城の方がかけてくれる、気にかけてくれている直接的な言葉やそうではなかったとしても、今回プログラムの中でさまざまなバトンをもらった気がしています。「尊い命」「救えた命」「救う事のできなかった命」。人の死というものによって生まれた、「悔しさ」「怒り」「不安」などのさまざまな感情を持って私たちに話してくれているということが、私の令和 6 年能登半島地震の被災体験と重なり、身に沁みて感じさせられました。ですが、私たちに話をしてくれるみなさんは強いなと感じました、さまざまな過去を乗り越えて私たちに魂の語りというものをしてくださいました。それがどれだけ辛いことなのか、弱い自分を見せることがどれだけ辛いことなのか、でもそこを生き抜いたからには…というような語りのような気もしています。そんな語りを受け、そんな涙は 2 度と流させないためにも、自分の受け取ったこの「語りのバトン」というものを、自分は持って走り出すのだ、というように改めて認識して、今後は歩み・走り続けたいと思います。

私の出身の能登・七尾には、自分には帰る場所がある、自分が居ていい場所がある・受け入れてくれる地域がある。そんな地域愛を持った人々が集うそんな場所にしたいという思いも強くなりました。また、そんな土地だからこそできる震災伝承というものにも目を向け、この震災によって犠牲になられた方々などの想いも背負っていかにして、震災というものを通じてどんなことを伝えることができるのかという事を考えていけるといいなども合わせて思いました。

震災というものは必ず起こり、震災というのは地域の社会課題が顕在化する大きな事象。ですが、日常を過ごす人たちにとって、この社会課題やその地域が抱える問題や、家族の問題というのは、必ず存在します。すでに、この問題を解決し緩和できる、震災でいうのであれば「事前防災」というのは可能なのです。そして、日常が突然崩れるということをあらためて実感しました。しかし、そのような状況の中で未来(明日)に向けて歩んでいる人がいます。そんなことをふとした時に思い出してみること、その人を思い、自分にできることを模索するし考えることは、あなたにも必ずできます。このようなことを伝えるだけではなくて、共に考える時間というものを増やしていく必要があると感じました。



高橋さんからお話をきいているところ

## 「記録の持つ大切さ」

文学部 2 年生 佐原 芭奈

このプログラムでは、歴史という「記録」が、人々の命を守るためにどれだけの価値があるのか、と深く考えさせられました。この四日間にわたって、同じ一つの「東日本大震災」で残された被害でありながら、様々な形の人々が持つ立場・思い・現状を知ることができました。

私が特に印象に残ったのは、門脇小学校や大川小学校にあった震災資料の展示でした。震災以前の石巻市のハザードマップでは、津波はとても小さな被害として想定されていました。それは、何故なのか。目を引いたのは、「貞観地震」についての記述です。平安時代に発生した「貞観地震」の津波堆積物から当時の津波の浸水範囲が明らかにされていました。貞観地震の浸水範囲は東北地方太平洋沖地震における浸水範囲とほとんどが同じと言えるものでした。しかし、調査結果が発表される前に東北地方太平洋沖地震が起り、被害想定範囲が人々に伝えられることはなく、避難意識が共有されることはありませんでした。もし、伝えることができたら。これはこの地域に限らず、日本すべての土地に存在する事例だと考えます。私は歴史を勉強する人間として、人々に震災被害の記録を伝える“事前防災”の大切さを考えたいと思いました。



大川小学校の裏山から見た風景

のぞみ野第二町内会では何人もの被災者の方々から話を聞きました。「語り部」としての被災者の方々の話は TV やインターネットで何度か目に

してはいましたが、震災から 13 年経て震災とは関係のない生活を送っている被災者の方々の話は初めて聞きました。「震災から 14 年が経ち、辛かったことも怖かったことも段々忘れてしまっている」暖かい時間が流れていた空間でその言葉を聞いて、心がすいた感覚がしました。震災が起こった後も人々の生活は続いていくし、つらい記憶を言葉に残していきたくない人たちだって存在しているので。震災の記憶をずっと背負っていくのはとても辛いことだと思います。私は、そんな被災者の方々が記憶を手放すことを、自分自身で咎めないようにするために、震災の記録を伝えていく機構と非被災者たちがその記録を受け取ろうとする姿勢を整えていくことが必要だと考えました。今回のプログラムに参加してくださった方々と触れ合い、歴史と関わる身として、私自身にもできることを見つけていきたいと深く思いました。



防災教育の様子

このプログラムで、被災者個人の方々がそれぞれの“当時の正しい記録”を伝えていこうとする姿を見ました。その姿はとても強く見え、同時により多くの人々が支えていかなければならないと思わされました。今年で 13 年。いま現在当事者でも薄れていく記録は、これから先 10 年後、30 年後、50 年後にはどうなってしまうのでしょうか。歴史のもつ意義と、薄れていく怖さを自身の身体を通して知ることができた四日間でした。関わってくださった皆さんに、深い感謝を。

## 「避難に必要なことは何か」

社会部 2 年生 中矢 柊成

私は、今回東日本大震災で被災した地域である宮城県石巻市を訪れました。ニュースで何度も目にした大川小学校の震災遺構は、実際に見ると津波の被害を受けた小学校の姿が当時の姿で残っていました。語り部の方に案内していただき、教室の中を見ることができました。当時の児童が教室で談笑、勉強する様子が浮かんできました。その後、避難していただければ助かっていた裏山に登りました。歩いて三分ほどで登れる山だったので思っていたより近いという印象を受けました。語り部の方のお話の中で息子を亡くしたとおっしゃっていました。胸が痛くなりましたが、私たちに伝えてくださるということは私たちが次起こる災害に対して中心となって人を動かす人になってほしいという想いが込められているのだと勝手に思いました。これからの防災の在り方について考えさせられました。



震災遺構 大川小学校

雄勝ローズファクトリーガーデンの徳水先生から学んだことは、津波は地形によって変化することです。実際に訪れた大川小学校は川の河口から約5キロ内陸にある場所に位置していました。津波は川を遡上した波が大川地区を襲いました。当時の大川小学校付近のハザードマップでは被害がないとの情報でしたが実際には約9mの高さの津波でした。海より遠い内陸の地域の方の被害が大きかったことです。地形が関係しており、湾の奥に行くほど狭くなる地形であるリアス海岸だったからです。地形の把握の必要性を感じました。

スタディツアーを終えて実践したことは私の地元の災害情報と避難場所を調べました。愛媛県ということもあり、南海トラフ地震で津波の被害を受ける地域でもあります。予想では3メートルの津波がくる地域ですが、近くに川もあります。先ほどお話しした、大川小学校と同じ地形をしています。川の遡上と津波の高さを予想の倍の高さの津波がくると考え避難の仕方を考えたいです。



雄勝ローズファクトリーガーデン徳水先生の講義

去年福島県に訪れて原発事故を中心に東日本大震災について学びましたが、宮城県は津波の被害が多く犠牲者を生みました。二つの地域を訪れ、同じ東日本大震災ですが、被害・復興・被災者の体験も全く異なることに気づきました。東日本大震災の一部分を見るのではなく、多面的な視点から見ることで自分自身の知見をさらに広げ深められるのではないかと思います。

私は自分の命を守るには、自分で選択・判断し逃げる行動をとらなければならないと学びました。そして、想定外に備えることです。まず、自分が住んでいる地域のハザードマップ、地盤、活断層、地形を調べてもらいたいです。そして想定を遥かに超えてくる災害から自分の命を守るためには知識も必要です。自分の命を守ることは絶対ですが、将来の災害に備えて救える命が増えるためにも自分事として考えていきたいです。そして、防災イベントボランティアなどに参加して、知見を広げ被災地に訪れた経験を伝えていきたいです。

## 「向き合い続けることの大切さ」

政策学部 2 年生 井狩咲希

私はこのスタディツアーに参加してテレビからでは学ぶことができなかったことを学ぶことができ、直接現地に行かないとわからないことがこんなにもたくさんあることに驚きました。発災してからそのまま残された建物や木々、発災時の写真、被災者の方々のお話など今でも鮮明に私の中では残り続けています。



雄勝町の津波到達地点からの景色

例えば、津波の脅威。私たちが訪れた宮城県雄勝町では最大 17メートルの大津波が襲いました。裏山を相当上った地点まで津波が押し寄せたのです。津波が来た地点に立ち、ここまで津波が来たと思うと恐怖でした。今まで「津波」という単語は知っていたのですが、どのぐらいのものなのかはあまりつかめていませんでした。しかし、今回実際に津波到達地点に立って津波の脅威を身に染みて感じました。

多くの学びの中で特に私が考えさせられたきっかけは高橋頼雄さんのお話でした。高橋さんは東日本大震災で被災した一人でもあり、復興支援のために尽力を尽くされた一人でもあります。高橋さんは私たちに涙な

がらに被災した時のこと、今の日本の復興支援について話してくださいました。高橋さんはその中で今の日本の政治に関して触れられた場面があり、「今年はたくさん選挙が行われてたでしょ。そんなことをやってる場合じゃない。能登で支援を求めている人たちがいるのになぜ助けないのか。」と声を震わせながらおっしゃいました。私は今でもその言葉を忘れられません。私も能登半島地震が起こってからずっと日本の政治には疑問を抱いていました。なぜ今この話題について議論するのか、もっと他に議論すべきことがあるのになぜ議題にあげないのか。しかし、これを口に出す機会もなく胸の内に秘めているだけでした。そのため、被災したときのつらさを知っている高橋さんからその言葉を聞いたとき、虚しさと怒りの感情が私の中でこみ上げました。東日本大震災からの教訓があるはずなのに、なぜ発災一年が経っても未だに水道が使えない地域があるのか、なぜあんなにボランティアの数が少ないのか、助けてと声を挙げている人をなぜ助けないのか。今のままでは被災者をだれも救うことはできない、政治の進め方を見直すべきだと強く思いました。

こういった状況を改善していくために何が必要か、私は被災地と向き合い、声を挙げていくことが必要だと思います。「向き合う」ことは人によっては少し勇気のいることかもしれませんが。私もそうでし



高橋さんからお話を聞いている様子

た。しかし、被災地と向き合い、伝えることで被災者の人たちの助けになるだけでなく自分の大切な人を守ることもつながります。私はこれからも被災地と向き合い続け、自分が考えたことや学んだことを伝えていきます。

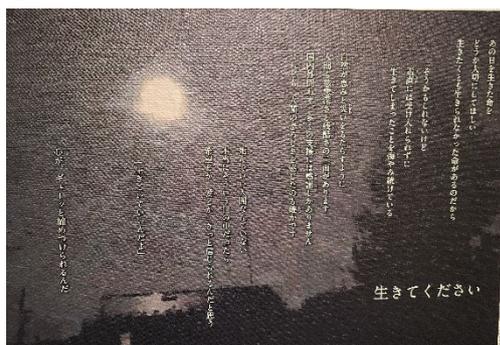
これを読んでくださったみなさんもまず被災地と向き合うための行動を起こしてみてください。

## 「感じたこと・学んだこと」

政策学部 2 年生 平川育海

私は今回のプログラムを通じて、命の尊さ、行動をする大切さ、身近な人に伝える大切さを学びました。

命の尊さに気付かされたきっかけは、門脇小学校に展示されていた「生きてください」という詩です。この詩には、被災者が当時思っていたことについて述べられています。この詩を見たときに、生き延びたけど、生き延びたからこそある悩みというものを感じられて、心がギュッと締め付けられました。「生きたくとも生きれなかった命があるのだから」という思いを読んで、今生きていることに感謝しながら自分のできることに取り組んでいく必要があると感じました。



「生きてくださいという詩」

復興公営住宅できよ子さんとお話させていただいて、命の尊さを再認識することができました。きよ子さんは旦那さんをコロナで亡くされたそうです。旦那さんが亡くなるまでの姿の話をしてくださいました。その話を聞いて自分の家族もそうなったら考えると、涙が出てきました。今まで元気だった人が、次の日にはいなくなってしまう可能性があることを知って命は尊いものなんだと感じました。命の尊さを学んだので自分にできることをこれから全力でやっていきたいと思っています。

行動する大切さに気付かされたのは、MEET 門脇さんのお話と高橋頼雄さんのお話です。MEET 門脇さんでは「声をかけることで助けられる命があった」というお話を聞きました。自分が行動することで、救える命やみんなの力になることができるとい

うことを学びました。今回地震に関する知識をたくさん学んだのにそれを活かすことができないと自分が後悔すると思うので、自分にできることは全力でやっていきたいと思いました。また、高橋頼雄さんが「今発電所などのたくさん問題があるけど、これからは君らの時代なんだから、君らが決めればいい」といわれました。この話を聞いて、確かにこれから一番長く生きるのは自分たちの世代なのに、自分たちが議論しないのはおかしいと思うことができました。今までは、自分が動いても何も変わらないと思っていましたが、東北で復興の最前線で動いている方々のお話を聞いて、自分にできることは全力でやるべきだと思いました。

今まで家族と災害に関する話をしてきませんでしたが、今回のプログラムを終えて避難所はどこにするかなど話し合いをしました。家族と離れて暮らしているからこそ心配な部分や、震災したときどうやって連絡を取るのかなど確認をしました。今回のプログラムに参加しなかったら、地震に関する話し合いをしなかったし、南海トラフが起きたときに心配することしかできなかったと思います。人に伝え話し合うことで防ぐことができる災害があると気が付くことがあり参加してよかったと思いました。



復興公営住宅で出会ったきよ子さん

## 「このツアーに参加して」

心理学部 2 年生 井田あい子

2011年3月11日からおよそ14年経った今、「もう14年」なのか、それとも「まだ14年」なのか非常に考えさせられるプログラムでした。私は、4日間で出会ったこれまでの石巻を伝えてくれた方々に深い感謝を伝えたいと共に、想いを託されたような気もしています。ニュースや本等で災害について今まで知っていたつもりでしたが、実際に行ってみると全く違う想いが湧いてくるようになりました。

私が特に印象に残っているのはMEET門脇周辺の街並みでした。震災後、かつての街は埋め立てられ、新しい町ができていました。人の少なさと整備された町の様子のちぐはぐさに気味が悪いと思ってしまったのが正直な感想です。防潮堤や広くて綺麗な記念公園がぽつんとある様子が、人が作ったミニチュア模型の様なイメージを抱きました。お話の中でも何度も聞いた言葉ですが「亡くなった人は帰ってこない」という事と同じように、流された町は2度と戻ってこないんだと感じました。

現地の方々は「あの時何があったか」「どうするべきだったか」「どうしてほしいか」を中心に話してくださいましたように思います。ただ、当時の詳細な話を聴いていると、14年経った今も消えない傷として残り続けているのだなと悲しき、辛さを強調される以上に、ひしひしと伝わってきました。一方で、大川小学校小学校で最後にスツと話してくださいしたことにも印象に残りました。「自分の息子は津波で亡くなってしまったが、なぜ逃げなかったのか気になっていた。最近、もう1人の息子から母親(自分)のことを待っていたと聞いた。直前も電話していたのに、どうして逃げろって言えなかったのかと後悔している。」とおっしゃっていました。私は昔、「大切な人の死と向き合う時、沢山の後悔が自分の中から溢れてくると思うけど、こういう時はいろんな人に楽しかった事も含めて話してみる事が大事なんだよ。」と知り合いが話してくれたことを思い出しました。こんな風に被災地の方々は乗り越えていこうと

しているのかもしれないとも思いました。話すことが辛いくらい、東日本大震災は沢山のものを奪ってしまいました。それでもたくましく、強く復興を望み、生きている方々が今でも伝える活動をしていることに本当に感謝してもしきれません。今は防潮堤と一緒に見るのが難しいですが、山と川と海の豊かさを受けた素晴らしい土地なのだと実際に行ってみて思いました。「被災地の石巻」ではなく、「自然豊かな石巻」という認識が日本全体に広まるのが復興の1つなのではないかと考えるようになりました。

自分も自分の周囲の人達も守るために防災・減災を考えたいと思いました。これをじっくりと時間をかけて実行できるのは大学生なんじゃないかと思います。実用的な避難訓練、かつての震災から得られた知見を基にこれから繋げる防災・減災教育等を大学生が地元の小中学校で行う等のプログラムがあっても良いのではないのでしょうか。門脇小学校周辺で発生した避難の連鎖はこのような活動を行うことで更に発生する確率を上げられるのではないかと思います。

このプログラムをきっかけに、これからも私に何が出来るのかを考える事と人に伝える事を続けていきたいと思っています。



防潮堤と山と海

## 「震災についてどれほど知り、向き合えているのか」

心理学部 2 年生 伊藤綾音

このツアーで「震災に対して備えるための一歩として、震災について知ることが大切」ということを学びました。



門脇小学校の裏山から見た海

特に、津波によって公民館の上にバスが乗り上げている写真から、震災について知ることの大切さに改めて気づかされました。この写真を見た時、私は「すずめの戸締り」という映画を思い出しました。「すずめの戸締り」では、地震を題材として扱っており、映画の冒頭では建物の上に船が乗っている光景があります。当時の私は前情報なしで映画館へ行ったことから、「船を建物の上に乗せるなんて発想、現実離れしていてすごい」という感想を抱いていました。全て分かった上で振り返ると、あまりに的外れな感想でした。このような感想を抱いたのも、震災や津波のことを知らなかったからでした。実際に、後日、知人は同じ光景を見てすぐに「ここで津波があったの？」と尋ねてきました。この時、震災の知識によって同じ光景を見ている、そこから見えるものが全く違うことに気づかされました。また、それと同時に、震災について知らない自分が恥ずかしくなりました。この体験を、ツアー内で見た公民館の上にバスが乗り上げている写真から思い出されました。そして、あの頃から私が震災について向き合ってこなかったことにも気づくことができました。

今回のツアーで、私がどれほど震災について無知であり、のうのうと過ごしていたのかを思い知らされました。同じように大学生生活を過ごしているようでも、防災について考え行動に起こしている人もいました。また、震災で辛い経験をしたことがある人がすぐ近くにいることを身をもって知ることができました。人だけでなく、龍谷大学が複数の活断層に囲まれた土地にあることなど、すぐそばにあるけれども『実感できていない』『気づいていない危険』があることも知りました。実際にツアー中に何度も、海の近くに位置していながらもこんなにも海が近いと思っていなかった、というお話を聞きました。海という見える自然でも、住宅地によって視界から遮られ距離感を掴めていないのであれば、活断層などの見えない部分に潜んでいる危険には、防災備品だけではなく、心としても備えが十分にできていないのではと感じます。調べようと思ったことは「やろう」と思った時にすぐ行動に移したいです。そのことが、防災への第一歩だと思います。調べることで災害について忘れずに心の備えすることにもつながります。後悔する前に、大切なものを守るための行動を取れるように、「まずは何に対して備える必要があるのか」や「身の回りの危険」を知るために調べ、次の防災へと繋げていきたいです。



大川小学校の裏山から見た川

## 「災害と日々の暮らし」

心理学部 2 年生 平井陽菜

私は今回のツアーで訪れるまで、津波の脅威を知っているつもりでいました。しかし、今振り返ると、どこか別世界の出来事ように感じていたように思います。実際に震災遺構を訪れ、お話を聞き、避難経路を辿る中で津波が町を襲ったことやその恐ろしさをより現実味を帯びて感じることができました。特に印象に残っているのは、高台からの景色です。想像以上の高さからの景色を目の当たりにして、この高さまで津波が到達すると思わず、逃げないという選択肢が浮かんでしまった人に共感できてしまう自分もいました。しかし、その一方で、高台から震災遺構や災害危険区域が見え、震災当時を想像すると、絶対に逃げるべきだったとを感じる気持ちが強くなっていきました。実際に被災された方々が体感したものを全て感じることはできませんが、津波への認識が変わったことは確かです。



高台から見えた大川小学校

私は今回のツアーを通して、自分で考えるということが備えにつながるということを学びました。実際に災害が起きると、家族や家が心配になったというお話を多く聞き、避難訓練の時とは全く異なる感情の中にいるということを感じました。また、地形によっても起こる災害やその特徴が異なるということも学びました。災害は、家や学校、屋外や室内のようにいつどこで起こるかかわからないものであり、混乱する災害時に少しでも冷静に判断をして行動

できる心構えが必要です。形式的や指示的になってしまっている避難訓練だけでは、想定外の状況に直面する機会が多く、訓練通りに行動することはできません。そのため、一人ひとりが少しでも災害について考えること、その日々の積み重ねが災害時の備えになると思いました。

実際に、今回のツアーを終え、帰省した際に自分が体験してきたことを家族に話しました。その中で、自分の地域ではどのような災害が起きるか、どこが安全なのかという話が話題に上りました。私の経験がみんなの備えにつながったと感じました。このことから、まずは、どんなに小さなことでも気づいたときに考えることが大切だと思いました。自然災害に関する情報は、耳にする機会が多いと思います。それをきっかけに備えにつなげてほしいと思いました。そして、被災地に行ったからこそ得られた学びや感情があったため、いろんな人に被災地に行って、それぞれにいろんなことを学んで感じてほしいと思いました。また、今回地域の方々から実際にお話を聞く中で、その土地が大好きな場所でもあるということが伝わりました。私は最初、被災地として、学ぶ場として捉えていました。しかし、風景や食べ物、人、魅力的なものであふれていて、また行きたいと思いましたが、その土地を守っていききたいとも思いました。



新山神社の裏山に落ちていた貝殻

## 「復興とは」

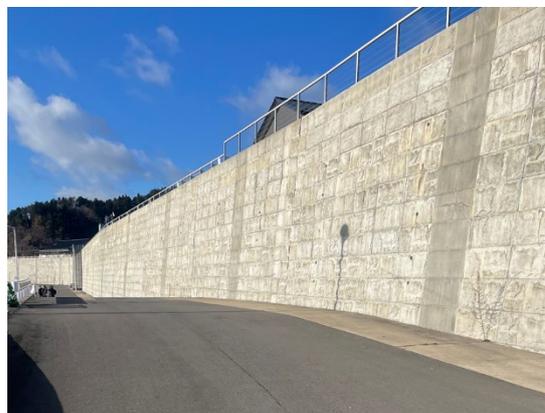
文学部 1 年生 近藤 恭香

私がこのツアーを通して学んだことは数えきれないほどあります。どのお話の中にも、必ず私の心に残る言葉があり、考えさせられる言葉がありました。しかし、その中でも特に私を悩ませた言葉が「復興」です。復興の形は人それぞれで、お話を聞く中でも復興に対する考えに違いがあるなど感じていました。復興に向けてみんなが一丸となったり、人とのつながりが復興になったり、我々は常に何かしらの復興をしているなど、どれも納得できる復興の形でした。ですが、私は復興という言葉自体に疑問を抱きました。なぜなら、震災で壊されたものが再び元ある形を取り戻したとしても、その背景にあったことを人々が忘れてしまえば意味がないと感じたからです。お話にもありましたが、宮城県には過去に何回か地震が発生し犠牲者も出ています。過去の震災が忘れ去られてしまえば、また同じことを繰り返してしまうことになります。震災の犠牲者がいなくなるために、一体どれだけの人が犠牲にならなければいけないのでしょうか。



大川小学校の崩れている校舎の一部

私がここから考えたのは、復興に終わりはないということです。新しい建物や防潮堤を建てたから復興が完了したと思う方も一定数いると思います。しかし、私はその土地、地域を形づくるのはモノでは



防潮堤の写真

なく人々だと感じています。

スタディーツアーで出会った方々はさまざまな形で元の生活を取り戻しながらも、しっかりと震災に向き合い伝えていくということをされていました。この「向き合う」という姿勢こそが復興のあるべき形であり、復興に終わりはないと言えることができる理由です。つまり、私たちに今必要なのは人との「つながり」を絶やさないことです。「雄勝ローズファクトリーガーデン」でボランティアの方々から「無償の愛」を受けたからこそ、無償でお返しするというつながりを大切にされているとお話をされていたことが、とても印象に残っています。私は対価というものにそれほどの意味はなく、むしろつながることに大きな価値があるという風に捉えました。「無償」でも必ず人々の心に残るものはあるのだと思います。

このスタディーツアーも無数の「つながり」によって創り上げることができています。震災というものに向き合うきっかけができたのも、つながりがあってこそだと感じます。ツアーを通して震災を自分ごととして捉えることで、また新たな視点を得ることができると知りました。次は、私たちがこのつながりを絶やさないように伝えていかなければならないと強く思いました。復興は終わらせない方が正しいのではないかと、改めて深く考えさせられました。

## 「この経験をどう次につなげるか」

政策学部 1 年生 折元慎一朗

私は 12/25(水)~28(土)の 4 日間で多くのことを経験し、時に悲しみ、時に悩むことなどありましたが、このプログラムからたくさんの学びを得ることができました。

私がこの震災を学ぶプログラムに応募しようと思ったのは4年前、宮城県の友達に震災当時のことを聞いた際、「その話はしない。思い出すと震えが止まらない。」と言われた経験からです。私はその言葉を聞いて自分が無責任な発言をしたなど感じると共に反省の意を込めて実際に現地に赴き、その当時から知る大切だと感じたのです。そしてこの度、宮城県で学べる機会と巡り会い、現地に行けたことに感謝しております。これから実際に現地に赴き「学んだこと」「周囲に伝えたいこと」について記述していこうと思います。

最初に「学んだこと」について 2 つほど取り上げます。



門脇小学校3階から海をながめた景色  
「正直ここなら安全だと思っていました。」

1 つ目は災害の際、「ここなら大丈夫!」という思い込みは危険ということです。なぜなら液状化、津波、火災などの複合災害が起こったり、地形や高層ビルの密集によって予想よりも高い津波が来る可能性があるからです。2 つ目は「家族を探さない。待たない。」ということです。最初は残酷な言葉だなど感じていましたが、『別の場所に避難して生

きている可能性があるのに、探したり、待つことで自分の命を落とすことにつながる危険性がある』という話を聞いてハッとさせられました。この 2 つのことから正しい災害の知識を知り、正しく恐れるという事前防災が大切だと感じました。

次に「周囲に伝えたいこと」について3つほど取り上げます。1 つ目は雄勝ローズファクトリーガーデンの徳水さんが語って下さった『私たちが生きている間に必ず南海トラフが来る』ということです。2 つ目は『家族と連絡手段やどこに避難するのかを話し合っておくこと』。3 つ目は MEET 門脇の中川さんが語って下さった『逃げる勇気を持つこと・逃げようと言える人になること』です。すべては自分の命を守り、大切な人の命を守るために必要なことなので、そのことを念頭に置きながら3つのことをしっかり感情をこめて伝えようと思います。



最後になりますが、このプログラムに関わって下さった皆様方に感謝を申し上げます。今回のプログラムで実際に現地に訪れ、学ぶことの大切さに気づかせてもらったので周囲の人たちにも被災地に足を運び学ぶことを促してみようと思います。自分自身はもう1度、震災遺構や伝承館の資料や展示をじっくりと見るために石巻市を訪れるなど、これからも関心を持ち続けようと思います。4 日間の経験をこのレポートのみで上手く語りつくすことができませんが、少しでも自分の思いが届いてくれると幸いです。

## 「スタディツアーでの学び」

政策学部 1 年生 世戸紳之典

私はこのスタディツアーで学んだことが二つあります。

一つ目は伝承活動の大切さです。現地でお話を聞きに行き「過去の話を知っていたから助かった」という事例を何度もお聞きしたことから、学ぶことは重要だと思いました。

その際に、ただ学ぶだけではなく、「自分ごととして考える」ということを意識すべきだと学びました。自分のこととして考えると危機感をとても実感できたと感じるとともに今後の自己の防災につながると考えました。

そして、これを次の世代へと繋いでいくことでも必要なことだと感じました。しかし、語り部さんの数が少なくなっているということも知りました。命を守る仕事として紹介していこうとする動きがあると聞いて魅力や必要性を伝えていかなければならないと感じました。また、現地で学んだ私たち自身も周りに伝えていかなければなりません。私たちが伝えていく中で輪を広げ、語るという行動の必要性を伝えていくことで語り部という職業につく人が増えていけばいいなと思います。



若い、新人の語り部の方からお話を聞いているところ

二つ目は、ボランティアのあり方についてです。高橋頼雄さんの話のなかで「ボランティアが働きすぎてはいけない、自分たちでできることは自身でや

ってもらべきだ」という言葉があり、ボランティア活動について見つめ直す機会となりました。私の今までのボランティア活動では、たくさん働こうとして一部便利屋のようになってしまった点もあったと思います。もちろん自分自身が役に立ちたいと思って行動したことなので不満があるわけではないですが、あくまでボランティアとして、相手のことを考えながら活動を行っていきたいと思いました。また、龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターの学生スタッフとしてボランティアを探しにきた方にこのことを伝えていくことでボランティアをする方も受け入れる方も両者ともにより良い活動と自身の成長が



高橋さんから話を聞いている様子

可能となるかもしれないなと考えています。

このスタディツアーを通じて、私は防災について学べたとともにこれからの私自身の生き方や心構えについて考え直すきっかけとなったと感じています。ここで学んだことは報告会や、日常の会話の中で様々な方に伝えていくことがこのプログラムに参加した者としての使命だと考えています。私たちが伝えていくことで防災について関心を持ってもらい、自分や周りの方の命を守る行動をとってもらって一人でも悲しむ人が少なくなるような社会を作っていければいいなと思います。

## 「現地に行って学ぶ大切さ」

国際学部 1 年生 稲場しほ

東日本大震災から学ぶ、まちづくりと防災・減災という目的で、宮城県に訪れました。今回のスタディツアーに参加するにあたり、震災遺構に実際に訪れることで、震災が地域や人々に与えた影響を直接知りたいと考えていました。特に、現地の方々がどのように震災を経験し、復興に向き合ってきたのか、その話を聞くことで、自分自身の災害に対する理解を深めたいという思いがありました。また、防災についての具体的な知見を得て、日常生活での備えに活かしたいと思い参加しました。



震災遺構・門脇小学校の内部

2 日目に震災遺構である門脇小学校と大川小学校を訪れました。現地では、写真や映像で見るよりも、震災当時の爪痕を肉眼で細部まで確認できたことで、その被害の大きさをより鮮明に感じるこ

とができました。

また、語り部さんの説明を聞きながら見学を進めたことで、震災当時の状況や避難行動への理解が深まりました。特に印象に残ったのは、震災当時に住民が避難したルートを実際に歩いたことや、避難するはずだった裏山に登った体験です。地形を直接その場に立って把握することで、津波がどこまで到達したのかが明確にわかり、災害の



大川小学校の裏手の山

規模と恐ろしさを実感しました。これらの体験を通じて、震災が地域や人々に与えた影響の大きさを改めて感じるとともに、自分自身も災害を身近なものとして捉える重要性を考えさせられました。

さらに、現地での学びの中で心に残ったのは、東北大学の学生さんが語った「イレギュラー時に適切な判断を取ることが大切」といった言葉です。この言葉は、震災当時の混乱や予期せぬ事態の中で正しい行動を取る難しさを想像させ、防災について深く考えるきっかけとなりました。また、語り部さんが語った「想定外を想定内にする」といった言葉も非常に印象的でした。災害はいつどこで発生するかわからないからこそ、常に備えを意識し、自分が取るべき行動を考え続ける必要性を感じました。これらの言葉を胸に、普段から冷静に対応できる力を養い、災害時に適切な行動が取れるようになりたいと感じました。

今回の学びを活かし、防災において重要な判断力と行動力を養うために、災害について継続的に学び続けたいと考えました。雄勝ローズファクトリーガーデンの徳水さんがお話しされていた危険予測・回避能力の最終段階である判断力と行動力を鍛えるため、避難訓練や避難経路の確認を行っていない、イレギュラーな状況下でも適切な判断ができる力を身につけたいです。また、ハザードマップを一度確認するだけでなく、定期的に家族や周囲の人々と災害が起きた際の行動を確認し、共有する時間を作りたいと感じました。

今回のスタディツアーを通じて、災害や防災を自分ごととして深く考え、学ぶ貴重な機会を得ることができました。また、自分だけで学びを完結させるのではなく、この経験を周りの人々に共有し、防災意識を上げていきたいと感じました。さらに、地元の方々と交流し、震災の記憶や復興への思いに触れられたことも大変貴重な体験でした。今回の機会を提供してくださった方々、そしてお話を聞かせてくださった皆さまに心より感謝申し上げます。

## 「現地で学ぶことの意義」

国際学部 1 年生 山口礼

私は、この 4 日間を通して、改めて東日本大震災について学び、無知であることの怖さを感じました。実際に見ることではか感じられないものが多くあり、同時に、現地に訪れることの大切さを学んだと思います。「もし今、災害が起こったら?」とイメージするのは難しく、どこか目を背けていたところがありました。考え続けなければいけないことだと気付かされました。

今までもなにかと防災の面について学ぶ機会がありました。震災後の復興やまちづくり、防災教育、行政との関わりなど、初めて知ることが多くありました。特に、防災教育については、学校教育に関心があったので興味深く、現代の形式的な避難訓練に疑問を持つようになりました。学校の防災教育が、子どもたちの行動を中心とした避難の連鎖を生むと同時に、地域コミュニティとして防災意識を高める役割を担うことができるのではないかと思います。私たち大学生は、地域の方々との交流の機会が減ってきており、いざという時に、近くで声かけができるまで親睦を深める必要があると感じました。そのような関係性を築いていくには、どのような取り組みを行っていくべきか考えさせられました。



門脇小学校に訪問した際の写真

今回のプログラムを経て、私自身が実践できているのは、家族と友人に伝えることと、私の日常生活に落とし込んで考えることです。それは、今まで

になかった視点で、周りを見るようになったと感じることが多々あるからです。例えば、家と川、指定されている避難所への道中を確認したり、最寄り駅で災害対応型自動販売機を見つけたりしました。災害と防災への意識が高まったことで、今まで知らなかったことに気付くことのできる視野を得られたと感じます。貴重な体験から過去の出来事を正しく知ることで、現在と照らし合わせて考え、より良く改善することができると思います。その積み重ねの一つとして、私の学んだことが未来の私や後世に生きる人々への救いになれるように考えていこうと思います。

今後は、語り部さんから教えていただいたことを、私一人で終わらせるのではなく、より多くの人に伝えるべく行動していきたいと考えています。まずは事後報告会をきっかけに、周囲の人に伝えることで、コミュニティとして防災意識を高めていきたいです。また、学校での防災教育について知識を増やし、現状の改善に向けてどうすればいいのか学んでいきたいと考えています。常にアンテナを張って、東日本大震災や能登半島地震をはじめとする、さまざまな災害に関心を持ち続けていきたいです。



## 「現地に行って学ぶ大切さ」

農学部 1 年生 雨宮 正典

今回のスタディツアーでとても気づかされたことは、実際に被災した現場に行くことが災害を学ぶには必要だということです。実際に被災した建物などの現場を訪れ、被災された人から話を聞くと、テレビや写真ではつかみにくい、人の感情や建物の雰囲気などが全身に伝わってくるような感じがして、ネットやテレビなどから学ぶものとは違いとても記憶に残ったからです。それを感じたのは門脇小学校と大川小学校の見学でした。門脇小学校の焼けた部屋から見た時のことですが、教室は焼け落ち部屋の向こうは公園が広がっていました。そこを見た時、14年前はそこには家が広がっていて、海も見え、日常が広がっていたのかなって思うと、今の様子を見て、呆然とした気持ちになりました。



門脇小学校の近くの丘から見える景色

大川小学校は実際に行けば助かったはずの山に登り、そこから見える景色を見てみると大川小学校からここまでこんなに近いのにと感じるほど簡単に逃げ切れたことを思うととても悲しかったです。現地に行ったからこそ、その雰囲気などが分かりったことがあったから災害の現地に行くことは必要だなどと思いました。また避難の連鎖についても学び、門脇小学校で小学生の避難行動が地域住民に広がり助かった人もいと聞き、まず自分が家族にし

っかりとこのスタディツアーで学んだことなどを伝えること、私たちが今度するスタディツアーの報告会を受けた人が家族などの他人に伝えやすくなるような発表をできるようにしていき、1人でも多くの人に東日本大震災から学んだことを伝えて、また新たな災害から過去の経験を無駄にせず、1人でも多くの人々が助けられればいいなと思いました。そして学んだことは地域によって様々な災害の特徴があることです。雄勝ローズファクトリーでの講義で津波のパターンについて詳しく地形ごとに分析されており、大川小学校での想定外の津波の原因なども分析されていました。とても多くのパターン、分析されており、びっくりしたのと、津波災害の恐ろしさも改めて実感させられました。ここで特に記憶残ったのは大阪での津波災害です。講義で、南海トラフが起こったら大阪に5mの津波が来るのと石油などが流れて津波火災が発生すると書いており、とても驚きました。自分の父親が大阪に働きに行っており、大阪湾に近い地域で働いています。なのでまず父親にそういう危険が大阪にあることを伝えること、そしてもし大阪に津波火災が起こったらどうするかを一緒に考えないといけないと思いました。雄勝ローズファクトリーのお話も実際にいかないと知らなかったものであり、その現地で学ぶ大切さを今



雄勝ローズファクトリーガーデンでの講義の様子

回のスタディツアーで学びました。

## 龍谷大学ボランティア・NPO活動センター

ホームページ：<https://www.ryukoku.ac.jp/npo/>  
E-mail: ryuvnc@ad.ryukoku.ac.jp

深草：〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67  
TEL：075-645-2047 Fax:075-645-2064

瀬田：〒520-2194 大津市瀬田大江町横谷1-5  
TEL：077-544-7252 Fax:077-544-7261